

プルーストはサント＝ブーヴの詩と小説をいかに読まなかったか

池田, 潤
白百合女子大学言語・文学研究センター：客員所員

<https://doi.org/10.15017/7402165>

出版情報：Stella. 44, pp.135-151, 2025-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン：

権利関係：



プルーストはサント＝ブーヴの詩と小説を いかに読まなかったか

池 田 潤

プルーストはサント＝ブーヴのかなり熱心な読者である。未発表に終わったとはいえ、「サント＝ブーヴに反論する」執筆にあたってはひろくその著作にあたっている。では、批評家のキャリアの特に前半において手がけられていた詩や小説をプルーストはどれくらい読んでいたのだろうか。この問いには、各種索引¹⁾を参照することですぐにひとまずの答えを出すことはできる。すなわち、プルーストはサント＝ブーヴの詩と小説をあまり読んでいない、ないし関心がない。

サント＝ブーヴが批評以外のジャンルにおいても文学史に名を残しているにもかかわらずプルーストが淡泊な姿勢をみせていることに、なんらかの説明を与えることは可能であろうか。詩人としては一般にロマン主義に属するとされるサント＝ブーヴを読まなかったプルーストだが、ユゴー、ヴィニー、ミュッセラの詩句には親しんでいた。本稿は、その読書のあり方を跡づけることを直接の目的としつつ、そこからさらに、プルーストがロマン主義とどのように交差し得るかという展望についても模索したい。

サント＝ブーヴの諸作品への言及

まずはサント＝ブーヴのそれぞれの作品についてプルーストによる言及を確認しよう。

はじめに『愛欲』（1834年）であるが、著者によるこの唯一の小説作品について『失われた時を求めて』には一切言及がない。初期作品においても同様である。「サント＝ブーヴに反論する」では一度だけ言及されるが、それは引用されるボードレールの手紙のなかでのことであり、プルースト自身が触れているわけではない。唯一、メモ書きとして「二番手の魂について『愛欲』の引用」²⁾という記述が残されている。「二番手の魂（âmes secondes）」はたしかに『愛欲』

に見える文言だが³⁾、プルーストがこのメモ書きをその後発展させた形跡はない。本作は何度も版を重ねた成功作とあっていい作品で、文学史上にも単なる批評家の手すさびという以上の位置を占めているはずであるが、プルーストはほとんど興味を示していない。書簡では二度言及されているものの、いずれもバルザックが『谷間の百合』を執筆する動機となる逸話が話題となっているばかりで⁴⁾、この小説の内容には触れられていない。

続いて『ジョゼフ・ドロルムの生涯と詩と思想』(1829年)。これも初期の代表作であり、架空の詩人ジョゼフ・ドロルムの評伝にその作品を付すという手の込んだ韜晦の見られる形式になっている。ところが『失われた時を求めて』、初期作品、書簡いずれにも言及はない。

「サント＝ブーヴに反論する」ではこの作品所収の「黄色の光」という詩への言及がある。「サント＝ブーヴの作品でまだしもましなのは彼の詩句なのではないかと思うことがある。[…]'黄色の光'や'ラシーヌの涙'、彼のあらゆる詩には、散文作品全体よりも直接的な感情がある」⁵⁾。サント＝ブーヴがほとんど全面的に批判、というよりも非難されているこの未発表評論では例外的に、評価の言葉が述べられている箇所である。しかしそれも辛辣なレトリックによるものだということには注意しなければならない。この箇所が続く部分にはこう書かれている――

しかしこのちょっとしたもの、ちょっとしたものだが魅力的でまっすぐな詩が示しているのは――それだけが彼にあっては唯一本物だと思えるわけだが――すばらしく巨大で、わきたつような批評作品全体は何の意味もないということなのだ、結局すばらしいものは全部詩のなかにつままっているわけだから。見かけとしては『月曜閑談』、実態はわずかばかりの詩句。その詩句のおかげで、批評家の作品全体は、永遠と釣り合うものになっている。⁶⁾

詩作品がわずかにもちあげられるのは、つまるところ批評家としての活動を全否定するためであるわけだ。詩についても、ほめているのはあくまでレトリックの便宜のためだといわんばかりに、「ちょっとしたもの」「わずかばかりの詩句」と、質量ともにたいしたものではないのだと繰り返されているのは執拗でさえある。なお、ここで挙げられているもう一篇の詩「ラシーヌの涙」は詩集『慰め』(1830年)所収で、「黄色の光」と同様、それぞれの詩集を代表する作品

である。

ところで『慰め』には、プルーストが詩句を引用するおそらく唯一の詩が収められている。1919年、リオネル・ハウザー宛書簡でのことだ――

手紙の上に記した住所の通り、引っ越しました（あまりに苦しくてこれまで隠していました）。このアパートマンも仮にということでは借りられなかったもので、遠からずまた引っ越さなければならないでしょう。詩人がうたった、「同じ家で生まれ、暮らし、死ぬ」のことを思うわけですが、自分はそうはならなくて残念です。⁷⁾

小説・批評・書簡などを通して、プルーストが文面を引用したサント＝ブーヴの詩作品はこれが唯一と思われるが、残念ながら特段文学的な文脈においてとはいえない。プルーストは書簡で文学作品を引用する場合、かなり気楽な、ただその時々のお話の内容に近いだけのものを引いてくることが多く、これもその一例といえる。「同じ家で生まれ、暮らし、死ぬ」という、「エルネスト・フイネに」と題された詩の一行目を引き合いに出し、引越しが続きそうな自分にはかなわないことだと述べる、それ以上の意図をこの引用に見出すのは難しそうだ。

ただ、この引用があることによって、プルーストがサント＝ブーヴの詩をある程度読んでいたのだということはわかる。もちろん先に「黄色の光」と「ラシーヌの涙」への言及をみたが、有名な詩について、「直接的な感情がある」という簡単な感想が述べられるにとどまっていた。しかしこの書簡で、特にサント＝ブーヴが話題になっていない文脈のなかで、自分の生活の状況になぞらえた引用がなされていることから、一定の関心をともなう読書がなされていたと窺えよう。

プルーストが確実に読んだということでは、「ボワローの泉水、モレ伯爵夫人への書簡」という詩も挙げることができる。これは詩集『八月の想い』（1837年）所収の作品で、『失われた時を求めて』において、タイトルや文面は示されないものの「サント＝ブーヴのもっとも美しい詩のひとつ」とされる。『失われた時を求めて』でサント＝ブーヴの詩が具体的に言及されるのはおそらくこれがただひとつの例で、かつこの作品は批評や書簡ではまったく触れられていない。

言及があるのは、「見出された時」の、ゴンクール『日記』のパスティッシュ

の少し後のところでのことである――

サント＝ブーヴのもっとも美しい詩のひとつはあらゆる才能と美しさを享けた少女が泉水の前にあらわれるところをうたったもので、シャンプラトル嬢はこの時10歳に満たなかったはずだ。ノアイユ伯爵夫人という天才詩人はその義理の母、シャンプラトル家から嫁いだノアイユ公爵夫人にまったき敬愛の念をいだいてはいたが、その肖像を手がけとなったなら、サント＝ブーヴが50年前に描いたものとははっきりとした対照をなしたことだろう。⁸⁾

主人公の「私」がゴンクール『日記』を読んだ後に続く数ページは、文学作品とそこに描かれた現実のモデル、また現実の作者をめぐる考察が幾重にも重ねられている箇所だ。つまらない人間だと思われた人物も、なんらかの作品に描かれているとなると興味をそそる。ただしその同じ人物と交流のあった作家以外の人々が実際に当時その人物を高く評価していたとは限らない。それは作家にしか看取り得ない卓越した面があったということなのかもしれないし、あるいは作家が書いたことばかりが後世にまで残ってしまった結果なのかもしれない。一方で作家は、すぐれた作品を産み出すにあたり自分自身、社会的に高く評価されるような立派な人間である必要はない、云々といった議論が続く。

引用した一節も文学作品とそこに描かれた人物のモデルについての考察の一角をなしている。サント＝ブーヴが詩に描いた、少女の頃のシャンプラトル嬢の姿は、その50年後に、みずからの義理の娘となった別の詩人の手にかかればまったく異なるものになるであろうという推測、想像だ。描かれる対象が、同じ人物といえども時期に50年の開きがあり、かつ別の詩人が描いたならばという仮定であるからには、当然の話ではある。この一節は、そうしたあたりまえの推論をこの前後の議論の重なりの中かでひとつの層となし、その重層的な議論の全体が文学作品が現実を描くということの単純なようで複雑かつ相対的な神秘を示唆する、その一翼を担っている。

本稿としては、ここでサント＝ブーヴが引き合いに出されたことの意味のほうにもっぱら関心を向けたい。

考慮すべきこととしてまず挙げられるのは、ノアイユ伯爵夫人との交友関係であろう。夫人の詩人としての才能は、詩集『眩惑』について、『フィガロ』1907年6月15日付の別冊文学特集に発表した文章のなかでも、この一節と同じ「天才 (génie)」という語で称えられている⁹⁾。直接の知り合いであり、みずから高

く評価している詩人の義理の母親が、半世紀前に詩人によってその美しさをうたわれていたという事実は、「見出された時」のこの文脈のなかでひきあいに出すにふさわしいという判断だったのであろう。

もうひとつは、やはりサント＝ブーヴでは詩を評価する立場が一貫しているのだと考えられるだろう。引用した一節を見るに、「サント＝ブーヴに反論する」にあった記述も、あながち意地の悪いレトリックとばかりはいえないのかもしれない。アンナ・ド・ノアイユへの賛辞に社交的な配慮が含まれていたにせよ、むしろそうだからこそいっそう、両者を並べて引き合いに出すにあたっては慎重かつ真摯な態度がとられたはずだ。

詩人としてのサント＝ブーヴを評価するということにかんして、『失われた時を求めて』では次のような明示的な記述がある。「ある時は批評家の、またある時は詩人のサント＝ブーヴの方をより高く評価するということ、ミュッセの詩はきわめて無意味なものを除いて排し、むしろコント作家として熱狂的に支持するということなどを私は見たことがあったのだ」¹⁰⁾。これは「ゲルマントの方」のサロン描写のなかで、社交人たちからもてはやされるゲルマント公爵夫人の才気について、その本質のひとつは常識の逆張りをする発言にあると語り手が分析する一節に続く部分だが、それと似たようなことは文芸批評にもよく見られるものなのだと、サント＝ブーヴとミュッセをめぐる批評言説が例に挙げられるのである。詩を評価するというプルースト自身の立場にある程度の一貫性があるとすれば、この記述は自嘲の類ではなく文芸批評についての一般論に具体的な例を与えたものと考えるのが妥当だということになる。

ところで、詩人としてのサント＝ブーヴを評価する人物が実際にプルーストの身近なところにいたということは考慮されてもいいかもしれない。高校以来の友人、ダニエル・アレヴィである。

サント＝ブーヴの詩を評価する言説

プルーストはアレヴィによるサント＝ブーヴ評に直接言及している。1920年、『新フランス評論』に発表された「フロベールの文体について」という文章のなかでのことだ――

この同じアレヴィ氏の記事はよく書けているが、それがいま手元にあれば、われわれはもはや散文だけでなく詩もよく読めなくなっているのだとわかるかもしれない。筆

者はサント＝ブーヴの詩句を2つもってきている。ひとつはサント＝ブーヴというよりアンドレ・リヴォワール氏の詩句だ。もうひとつは、ソレントはわがはてなき夢を返してくれたで、これはrの音を喉で発音すれば醜悪、巻き舌で発音すれば滑稽になるしろものだ。普通は、意図して母音や子音を繰り返せば素晴らしい効果が得られるはずだが（ラシーヌの『イフィジェニー』、『フェードル』）。¹¹⁾

ここで言われているアレヴィの記事とは、1919年10月13日に『デバ』に掲載された、「サント＝ブーヴの記憶」という文章のことだ。1919年は批評家の没後50年という周年忌の年である。ではアレヴィはその記事のなかでどのようなことを書いているのか。まず目に留まるのは次のような記述だ。「サント＝ブーヴといえはよく耳にするのは、すばらしい批評家ということだが、実際には貧しき魂、ささやかな詩人なのだ」¹²⁾。サント＝ブーヴを評するに、「貧しい(pauvre)」という語をはじめにもってきている点には注目すべきで、これはのちのジャン＝ピエール・リシャールの言葉、「サント＝ブーヴ的原風景というべきものがあるのだ。ただ、それは根本的貧しさによって特徴づけられている」¹³⁾とそのまま重なる。

アレヴィは次のように続ける——「そう、サント＝ブーヴにも詩人としての時期があり、靈感があった。『百周年文集』をあらためてひもとけば、ポール・ブルジェ氏が、この不遇なる才能について精力的に分析しているではないか」¹⁴⁾。

アレヴィのこの記事が1919年、サント＝ブーヴ生誕100周年が1904年である。プルーストの同時代において、サント＝ブーヴの詩人としての活動は一般には忘れられており、一方で一部の論者がその再評価を唱えていた。そのひとりがダニエル・アレヴィであったというわけだ。アレヴィは「ソレント」の詩を引用する直前にはこう書いている——

サント＝ブーヴは100年後、150年後には、12人ほどの我慢強い識者や専門家が、16世紀、17世紀、18世紀、また19世紀前半のなんらかのフランス人について知見や判断を求める際に読まれるのみとなるのかもしれない。[...] いや、そんなことはない！ 記憶がよみがえる、ああ、これは驚き、とある詩句だ、その甘美なる音楽性により記憶に永遠に刻まれた詩句。¹⁵⁾

サント＝ブーヴの批評家としての膨大な仕事は、後世においてはごくわずかな人々が専門的な必要から読むだけになるのかもしれないとの記述は、これも現

代の状況がある程度言い当てているといえるかもしれないが、おそらくこの当時においてすでにそう想像するだけの理由があったのだろう。しかし何より目を引くのは、批評家としてはそのようにして実質的に忘れ去られるのであろうがいくつかの詩句は永遠に記憶に刻まれているという表現で、これはこの10数年前にプルーストが未発表のままにした記述と同じ見解を表している。

ところが、1920年の「フロベールの文体について」では、かつてみずからが書きつけた内容に重なるはずの旧友の意見にはむしろ疑念が示されていた。「われわれはもはや散文だけでなく詩もよく読めなくなっている」というかなり攻撃的な文言を先の引用にみたとおりで、「ソレント」の詩句は醜悪あるいは滑稽なものでしかないという主張である。なお、アレヴィが引用したこの詩句は、テオフィル・ゴーチエによる、ボードレールの『悪の華』紹介文でも取り上げられている。ゴーチエはボードレールの詩の音楽性を指摘するにあたり、まさしくアリテラシオンの成功例として「ソレント」の詩句を引用し、サント＝ブーヴこそはそうした繊細な表現を「極上の技法をもって、こなれてなめらかな、実にイタリア的なソネで実践してみせた」¹⁶⁾と絶賛している。プルーストとアレヴィがともにこの文章を読んでいた可能性は高い。一方はゴーチエに同調し、他方は反発することになるのである。

アレヴィのサント＝ブーヴ評についてプルーストはこだわりを見せていて、1921年6月に『新フランス評論』に発表したボードレール論にも言及がある。「1年ほど前にアレヴィ氏が引用したサント＝ブーヴの快い句は私もよく知っているものだが、今でも、それほどたいしたものではないと考えている」¹⁷⁾。

この時期、二人の直接の交友関係が疎遠になっていたことはプルースト自身が述べている。1920年11月15日『パリ評論』初出、翌年ポール・モランの『タンドル・ストック』序文となる文章では、高校時代の旧友について、「25年来彼には会っていないが、その権威はたえず増大している」¹⁸⁾とつきはなしたような書き方がされている。

ところで、詩人としてのサント＝ブーヴということをめぐっては、実はもうひとりの友人の姿も見え隠れしている。ユゴー研究者で詩人のフェルナン・グレーグだ。

1904年11月27日のものと推定される手紙はプルーストからグレーグへのお礼状で、グレーグが自身の著書、翌1905年に出版される『ヴィクトル・ユゴー

研究』¹⁹⁾を献本したものとみられる。具体的に本の内容に触れられた感想のなかには次のような記述がある。

「『涙ながして』はサント＝ブーヴの影響だという指摘はじつにすばらしい、細やかな文学的議論です」²⁰⁾。グレーグは著書のなかで、ユゴーがとある詩のなかで«avec des larmes»ではなく«avec larmes」と書いているのは『ジョゼフ・ドロルム』的だと述べていて²¹⁾、プルーストはその慧眼を称えているのだ。

グレーグにかんしてはもうひとつ、今一度「フロベールの文体について」に戻ると、この文章では、アレヴィがみずからの記事のなかに「サント＝ブーヴの詩句を2つもってきている」と述べられていた。実はこれはプルーストの記憶違いで、実際には「ソレント」の詩句に続けてさらにあと2つが引用されている――

それからこういうものもある（これらは友人のフェルナン・グレーグから吹きこまれたものだ）、凝縮された芳香の、美しき銘。

いつだって私の知る彼女は物思いに耽る真面目な人だった

私は青春が歌うたう花咲く一本の木だった²²⁾

これらはふたつとも『ジョゼフ・ドロルム』から引かれた詩句である。アレヴィとグレーグのあいだで、サント＝ブーヴの詩についてやりとりが交わされていたことがわかる。

このように、サント＝ブーヴの詩人としての仕事を高く評価するのは当時の文芸批評においてある程度の存在感がある主張であり、かつプルーストにとっては自分の友人たちが実際にその言説を担っていたという背景もあった。また、アレヴィやゴーチエの意見には真っ向から反対していることから、サント＝ブーヴの詩を自分なりの趣味をもって読んでいたことがわかる。

しかしながら、そうであればなおさら、サント＝ブーヴの詩にプルーストはもう少し関心を示してもよかったのではないか。記述が残されていない以上直接的にその真意にふみこむことはできないが、周縁的なアプローチの余地はある。そこで参照したいのがボードレル論だ。いうまでもなく、『悪の華』の詩人に対するプルーストの関心は非常に高く、作品を論じる際にも具体的な議論が展開される。その思い入れの強さのゆえに、詩人の向こう側にいるサント＝ブーヴについても、間接的にではあれプルーストの思考の輪郭をなぞることが

できるように思われるのだ。

ボードレール論から窺うサント＝ブーヴ

プルーストはボードレール論を2度手がけている。ひとつは「サント＝ブーヴに反論する」を構成するひとつの章としてであり、これはもちろん生前未発表である。もうひとつが1921年の『新フランス評論』6月号に掲載のもので、ジャック・リヴィエールの依頼を受けて執筆されたと見られる。

ボードレールについて論じるにあたり、サント＝ブーヴが参照されているのはいうまでもなく前者である。ところで、サント＝ブーヴは、正面からボードレールを批評記事の対象としてとりあげたことはない。残されている文章は3つで、ひとつめに『悪の華』献本のお礼状として送った書簡。これは『月曜閑談』に補遺として収録される。ふたつめは『悪の華』裁判に際してしたためられた詩人を弁護するメモ。これは生前未発表であるようだ。みつつめは「アカデミーの次期選挙について」と題して『コンスティテュシオネル』紙に発表された短文である。プルーストはおそらく、ウジェーヌ・クレペによる1887年出版のボードレール評伝²³⁾によって、これら3つの文章の全てを読んでいた。

プルーストの論点のひとつはボードレールのサント＝ブーヴへの心酔ぶりについてであって、引用されている書簡には実際へつらうような言葉が並んでいる――

[サント＝ブーヴの文章が] われわれにはいかにお粗末なものに見えるとしても、ボードレールは大喜びでした。「名前が売れた、好青年、フォーリー・ボードレール云々」という記事の後で、彼はサント＝ブーヴにこう書いています。「またお世話になってしまうとは、いつまでこんな調子なのでしょうね。どうお礼したものでしょう。[…]'黄色の光'や『愛欲』の、詩人、小説家サント＝ブーヴのどうしようもないファンである私は、今度は寄稿家としてのあなたも称えねばならないのでしょうか」。²⁴⁾

プルーストは、『悪の華』を書き得たほどの高みにある魂がサント＝ブーヴに媚を売らなければならなかったことを惜しみ、あれこれと思考をめぐらせる。「この時、ボードレールは素直に思いのままを書いたわけではないと仮定してみようか」²⁵⁾、「ボードレールはそれほどにまで自らを見誤っていたのだろうか」²⁶⁾。そして論述は例によって詩の世界と人の世界との二元論へといやおうなく引き寄せられていく。

しかしながら、ボードレーがサント＝ブーヴに示していた親愛の念を単なる社交上の便宜として説明するのには無理がありそうだ。「まさしくおっしゃる通りでした、『ジョゼフ・ドロルム』はひとつ前の時代の『悪の華』なのです。私にははれがましい比較です。どうか気を悪くなさらないでくださいね」²⁷⁾ というよく知られた書簡の文言はボードレー晩年のもので、自らを偽ってまで誰かに庇護を乞う必要があったとは思われない。プルーストもこの文言のことは知っていた。ただし少し認識に違いがあるようだ。「ボードレーには好意を抱いていて、つねづね作品に心ひかれ、作風も自分にほど近いなどと言っている(『ジョゼフ・ドロルム』は『悪の華』の前身だ。確認すること)」²⁸⁾。

「確認すること」とある通りの曖昧な記憶のなかでは、両者の類縁性をことさらに主張しているのはサント＝ブーヴの方だということになっている。ただ、この記憶違いはそれほど重大なものではなく、サント＝ブーヴの方からも親近感が示されていたことは事実だ。『悪の華』献本へのお礼状には次のような文言が見える――

あなたは、あなたもまた、ありとあらゆるところに詩を探す輩のひとりです。これまでもまったく異なる無辺の領野へと詩を探しに行った者たちがおりました。そこにはもう、あなたの居場所などほとんど残されていなかった。天と地の畑はあらかじめ刈り入れられていました。[…]

30年前のわれわれも、どこかに詩は落ちていないかとほうぼう探し回ったものです。大抵の畑はとうに丸裸で、目ぼしい月桂樹はみな摘み取られていました。『ジョゼフ・ドロルム』を書いていた頃の辛い心境が偲べれます。²⁹⁾

30年の世代の差があるにもかかわらず、詩への向き合い方において、自分たちの姿勢は同じなのだ。サント＝ブーヴは打ち明ける。「無辺の領野へと詩を探す」、「天と地の畑」、「目ぼしい月桂樹」云々というのがロマン派の詩人たちの仕事のことを指していることは明らかだ。同じ内容は『悪の華』裁判に際しての弁護のためのメモではいっそう明示的である――「詩の領野ではすべてが取り尽くされていました。ラマルティーヌが天空を取り、ヴィクトル・ユゴーが大地をそして大地以上のものを取りました」³⁰⁾。これらの言葉はまさしく、ダニエル・アレヴィ、またジャン＝ピエール・リシャールによる形容、「貧しさ」という語を思い出させる。サント＝ブーヴは、みずからと詩的原風景を同じくする者としてボードレーについて語っているのだ。

プルーストも両者の類縁性をまったく認めていないわけではない。ボードレールの詩句がときに、いかにユゴーさながらであるか、あるいは他の何人もの詩人の作品と見紛うほどであるかと述べられる箇所には、「ほかにもたくさん、あなたもサント＝ブーヴやジェラルール・ド・ネルヴァルかと思うだろうものがあります」³¹⁾という記述がある。「あなた」というのはもちろん、「サント＝ブーヴに反論する」全体の対話の相手である「お母さん」のことだ。プルーストの実の母親とどれほど重なるかはさておき、常識的な読書人という設定を与えられていることから、この類似は一般にも受け入れられるはずのものとして提示されているとわかる。ただし、ユゴー、ゴーチエ、シュリー・プリュドム、ラシーヌ、マラルメについては具体的なボードレールの詩句が挙げられているのに対し、サント＝ブーヴについてはそれがないというのは、本稿においては見逃せないところではある。具体例をあえて出さないのか、あるいは漠然とした印象しかないのか、真意をはかる手立てはないが、いずれにせよ両者の類縁性についてはこれ以上踏み込んで語られない。

もうひとつのボードレール論、1921年の記事は「サント＝ブーヴに反論する」の枠内にはないため、批評家の名が出てくることはない。ただ、この論考が冒頭、ユゴー論にもなっているという点は興味深い。プルーストはひとしきりその偉大さを論じたあと、しかしユゴーはあまりにも巧すぎるのだ、その点ヴィニーにはもっと「神秘の印象 (impression de mystère)」があるし、ボードレールも同様である、というように本題となる詩人についての話に入る。その後、ラシーヌとの対比という有名な箇所なのちにあるのが「ユゴーのいくつもの大文字、神との対話、散々の大騒ぎも、あわれなボードレールがみずからの心と体のうちなる苦悩にみいだしたものには及ばない」³²⁾という一節だ。

これはボードレールの古典主義的な性質を論じているところと比べればそれほどオリジナリティはないのかもしれないが、そのぶんごく自然にサント＝ブーヴの見方と重なっている。偉大なロマン派詩人とは逆をいくということであるが、注目したいのは「うちなる苦悩」と仮に訳した *intimité souffrante* にある *intimité* の語で、これもまたサント＝ブーヴの詩を語る際のキーワードだ。ロマン主義が世界・宇宙・人類・歴史といったまさしく大文字で記されるようなテーマを好んで選んだのに対し、サント＝ブーヴは個人の私的な生活に焦点を当てる。内面の詩 (*poésie d'intérieur*)、内観主義 (*intimisme*) と言われるス

タイトルだ。ここで先にミタリオネル・ハウザー宛の書簡を思い出してもいいかもしれない。プルーストが唯一引用したサント＝ブーヴの詩句は、広大無辺の世界をうたったものではなく、たったひとつの家で一生を終えるという内容であった。

このように状況を整理すると、やはり旧友たちとともに『ジョゼフ・ドロルム』や『慰め』を再評価し、ユゴーとはならなかった詩人としてのボードレールを偏愛するプルーストが、サント＝ブーヴの詩の愛読者でなかったはずはないという結論が導かれそうではある。しかし実際には、深いコミットを示す文献的な根拠を挙げることはできない。このちぐはぐさに説明を与えることはできるのか。プルーストはサント＝ブーヴの詩と小説をいかに読まなかったか、最後に、考えられる仮説の筋をいくつかたどってみたい。

ロマン主義のもうひとつの系譜

ひとつには、たとえ関心の方向性が似通っていたとしても、核心的なところでは心を動かされるには至らなかったというごくあたり前の説明が可能だろう。たとえば「見出された時」で、「私」が自分にとって本質的な文学的テーマについて語る際、ネルヴァル、シャトーブリアンと並んでボードレールも名前が挙げられて「かくも高貴なる系譜に私もつらなること」³³⁾をめざすと宣言がされるが、そこで問題となっているのは「レミニサンス」や「感覚転化 (sensation transposée)」であって、先に挙げた内観主義などではない。

ただ、文学への無力感を語るという点では両者に共通の関心が見られなくもない。先にボードレールへの私信にみた感覚は『愛欲』—プルーストがおそらくは読まなかった小説—にもあって、主人公のアモーリーは自分の傾向について次のように綴る——

幼い頃から天空のすばらしい平原や星々の草原に目を向け、その観照に誘われて驚異を見とおす者たちもいることだろう。大洋が彼らを呼ぶ〔…〕。あるいは原始林や古の民族の風習が〔…〕たえずつきまとうという者たちもいる。〔…〕私は待ち望みはしなかった、祈らなかった、見分けなかった。私が好むのは、私的な習慣、個人的な作法、家屋のこまごましたものなのだ。³⁴⁾

天空・大洋・原始林といった対象にひきよせられ瞑想へと誘われる人々とは対照的に、アモーリーが目をつけるのは個人の私的な生活だ。「私的な習慣 (habi-

tudes intimes)」と、intime の語が見えていることにも注目したい。小説のこの箇所は特に文学論が提示されるような場面ではなく、初めて招かれたクーアーン侯爵夫妻という貴族の館の描写がされているところである。この後、天空その他に惹かれる者たちの名前が具体的に挙げられるが、それはケプラー、コロンブス、ザビエルといった名であって詩人は含まれていない。この一節では、サント＝ブーヴの詩学が別のものに置き換えられる形で提示されているのだ。これは自分のことを架空の詩人に仕立てた『ジョゼフ・ドロルム』にも似た韜晦といえるかもしれないし、この作品がユゴー夫妻との三角関係をモデルとした一種の鍵小説であることによると考えることも許されるだろう。ともあれ示されるのは、一般に偉大なとされるような詩的テーマにあえて背を向けるという姿勢である。

あるいは、徐々に親密の度合いを増していくクーアーン夫人との散歩を描いたページに唐突に挿入される次のような一文、「私たちは沈む太陽の方にも昇る月の方にも向かっていなかった」³⁵⁾。この虚無的な情景の表現は小説の筋の上では一応、不倫関係の不毛を表しているということになるのであろうが、むしろそれは逆で、文学の空間からの疎外の感情を表すために、太陽や月に背を向けるということを言わんがために、不倫があるのではないかとすら考えたくなる。

プルースト的な疎外状況については改めて確認するまでもないだろう。ジョルジュ・バタイユが、『失われた時を求めて』においては「満ち足りなさ、結末部分の凱歌よりも深いのではないだろうか」³⁶⁾と述べているのは奇を衒った物言いではない。ジェラルド・ジュネットによる作品の「要約」を言い換えて、「マルセルは作家になるまで実にぐずぐずと仕事に着手するのを先延ばしにした」と変奏することも可能であろう³⁷⁾。プルーストにおいては、文学、また作家になることには、ひとつの職業に就くという以上の根源的な意味が付与されており、それゆえに現実の「私」は、自分は永遠にそこに到達できないと感ずるのである。

『愛欲』と『失われた時を求めて』はともに文学からの疎外をひとつの重要なテーマとしている。もちろんそれぞれの作品の表現は異なるし、たとえテーマを共有していたとしてもその位置付けや意味合いは同じではないが、それでも両者を並べてみたのは、ユゴーによってあまりにもフランス的なものとされて

しまったロマン主義が、ボードレールによってノヴァーリス的な側面を獲得するという「裏のロマン主義」とでもいうべきコンテクストにプルーストを位置付けられないかと考えたからだ³⁸⁾。ただしこのことを論じるにはもはや機会をあらためるべきだろう。本稿ではこの思いつきの契機にのみ触れるにとどめる。注目したいのは、先に挙げた文学への無力感のテーマとは反対に、自らの「構成の原理」を見出したという局面での「見出された時」の文言のいくつかだ――

すでにコンブレーで私は、あるイメージをいやおうなく眺めそこに精神を集中させていたのだ、雲や三角形や鐘楼や花や小石で、その表徴のもとにそれとはまったく別の、見つけ出すべく努めなければならないなにかがあるのではないかと感じていた、それらは、ただ物質的なものを表しているだけとも思われる象形文字のように、ある思考の顕れとなっていたのだ。[...] 形象によって記されたそれらの真実の意味を私は自分の頭のなかに探し出そうと努めたが、そこでは鐘楼や伸び放題の草といったものが、複雑にして華麗な判じものをなしていた。³⁹⁾

外的な事物のうちに何かが隠されているように思われるという感覚があって、それを見出すのはこちらの側、主観の側によってなされるべきことではあるのだけれども、一方でたしかにその契機は対象のうちにあり、それを読み解くという形でこそ内的で個人的なものが展開される。プルーストの理論をこのように抽象化できるとすれば、そこにはボードレールやサント＝ブーヴよりも、もっと直接的にノヴァーリスに近い部分があるのではないか。「人生で起こる偶然はみな、われわれが自分の欲するものを作り出すための材料となる。精神の豊かな人は、人生から多くのものを作り出す。まったく精神的な人にとっては、どんな出来事も、無限級数の第一項となり、終わりのなき小説の発端となるだろう」⁴⁰⁾ とはノヴァーリスの断章にある一節である。プルーストとノヴァーリス、またロマン主義一般との関係には、象徴主義までを含めた視野のなかでさらなる光をあてられるべきであろう。

結 語

「サント＝ブーヴに反論する」草稿群からはプルーストがかなり広く批評家の著作にあたったことが窺えるのに対し、詩と小説についてはほとんど関心を示した痕跡がない。サント＝ブーヴでは批評よりも詩の方がよほど価値があるのだという考えは、当時の批評言説に照らしても一定の意義をもつ主張だといえ

るが、しかしプルースト自身にはそれほど強い思い入れはないようでもある。一方で、ボードレール、またユゴーについて語られていることは、枠組みとしてはサント＝ブーヴの立場との類縁性を示すものであるため、なおさらいっそう『ジョゼフ・ドロルム』や『愛欲』への無関心は訝しくさえ感じられる。本稿が素描したのはこの奇妙な空白の輪郭にすぎないが、そこからおぼろげに見渡せるかもしれないことがらにまで踏み込むならば、次のことをひとまずの仮説として今後の課題とすることはできる。すなわち、直接の愛読書とはしなかったものの、サント＝ブーヴが「偉大なる」ロマン主義に背を向けつつ形成した水脈に、プルーストはある程度抽象化された問題意識において合流するといえるのではないか。天空や大洋ではなく、個人の日常や生活に焦点を当てるということ、そしてそうした非特権的で偶有的な事物や出来事をヒエログリフで書かれた判じもののようにして解読することで、みずからの精神のうちにあるはてなき物語を開くということ。『失われた時を求めて』のこのようなノヴァーリス的解釈は、ロマン主義論のなかにプルーストをどのように位置付けるかという問いを提起する。そしてこの問題においても、ロマン主義に対して両義的な立場を取り続けたサント＝ブーヴは探求のひとつの勘所となるだろう。

註

- 1) プレイヤッド版に付された巻末索引の他には以下を参照した—— Kazuyoshi YOSHIKAWA (éd.) , *Index général de la correspondance de Marcel Proust*, Kyoto : Presse de l'Université de Kyoto, 1998 ; Akio WADA, *Index général des cahiers de brouillons de Marcel Proust*, Osaka : L'Université d'Osaka, 2009.
- 2) Marcel PROUST, *Essai*. Édition publiée sous la direction d'Antoine COMPAGNON, avec la collaboration de Christophe PRADEAU et Matthieu VERNET, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2022, p. 1125 ; NAF 16636, f. 23 v^o.
- 3) Charles-Augustin SAINTE-BEUVE, *Volupté*, éd. André GUYAUX, Paris : Gallimard, 1986, p. 325.
- 4) *Correspondance de Marcel Proust (1880-1922)* . Édition établie par Philip KOLB, Paris : Plon, 1970-1993, 21 vol. [abrégée ensuite : *Corr.*] , t. II, p. 119 ; t. VI, p. 353.
- 5) Marcel PROUST, *Contre Sainte-Beuve* précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles* [abrégé ensuite : *CSB*] , Paris : Gallimard, 1971, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », p. 232 ; NAF 16636, f. 31 r^o.
- 6) *CSB*, p. 232 ; NAF 16636, f. 31 v^o.

- 7) *Corr.*, t. XVIII, p. 326, lettre à Lionel Hauser [le 12 juillet 1919] .
- 8) Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu*, Paris : Gallimard, 4 vol., coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1987-1989 [abrégé ensuite : *RTP*] , IV, p. 299.
- 9) *CSB*, p. 533.
- 10) *RTP*, II, p. 762.
- 11) *CSB*, p. 597.
- 12) Daniel HALÉVY, « La mémoire de Sainte-Beuve », *Journal des Débats*, le 13 octobre, 1919, p. 1.
- 13) Jean-Pierre RICHARD, « Sainte-Beuve et l'objet littéraire », in *Études sur le romantisme*, Paris : Éd. du Seuil, 1970, p. 251.
- 14) Daniel HALÉVY, « La mémoire de Sainte-Beuve », *Journal des Débats*, le 13 octobre 1919, p. 1.
- 15) *Ibid.*
- 16) Charles BAUDELAIRE, *Les Fleurs du mal*, précédées d'une notice par Théophile GAUTIER, Paris : Calmann-Lévy, 1868, p. 45.
- 17) *CSB*, p. 638.
- 18) *CSB*, p. 610. ここで直接に念頭におかれているのはアレヴィの別の記事である (Daniel HALÉVY, « À propos de Sainte-Beuve, 13 oct. 1869-13 oct. 1919 », *Minerve française*, t. IV, février 1920, pp. 219-296)。ふたりのあいだでは軽い応酬がなされていたわけである。
- 19) Fernand GREGH, *Étude sur Victor Hugo, suivie de pages sur Verlaine, l'Humanisme, Schumann, Massenet, Claude Debussy, Maurice Maeterlinck, etc.*, Paris : Eugène Fasquelle, 1905.
- 20) *Corr.*, t. IV, p. 356 [lettre à Fernand Gregh, du 27 novembre 1904] .
- 21) Fernand GREGH, *Étude sur Victor Hugo...*, *op. cit.*, pp. 42-43, cité par Philip KOLB, *Corr.*, t. IV, p. 359, n. 8.
- 22) Daniel HALÉVY, « La mémoire de Sainte-Beuve », art. cité, p. 1.
- 23) Eugène CRÉPET, *Charles Baudelaire*, Paris : Léon Vanier, 1904.
- 24) *CSB*, p. 247 ; Cahier 7, f. 61 r^o.
- 25) *CSB*, p. 247 ; Cahier 7, f. 60 r^o.
- 26) *CSB*, p. 248 ; Cahier 7, f. 62 r^o.
- 27) Charles BAUDELAIRE, *Correspondance*, texte établi, annoté et présenté par Claude PICHOS avec la collaboration de Jean ZIEGLER, Paris : coll. « Bibliothèque de la Pléiade », t. II, p. 474 [lettre à Sainte-Beuve, du 15 mars 1865] .
- 28) *CSB*, p. 261 ; Cahier 6, f. 13 r^o.
- 29) Charles-Augustin SAINTE-BEUVE, *Causeries du lundi*, Paris : Garnier Frères, 1851-1862, t. IX, p. 527-528. 訳文は鈴木和彦による。なお、池田潤・松村博史編訳による『サント＝ブーヴ評論選』が2026年、幻戯書房より刊行予定。

- 30) Eugène CRÉPET, *Charles Baudelaire*, Paris : Léon Vanier, 1904, p. 229. 強調は原文。訳文については前註に同じ。
- 31) *CSB*, p. 259 ; Cahier 6, f. 11 r^o.
- 32) *CSB*, p. 628.
- 33) *RTP*, IV, p. 499.
- 34) Charles-Augustin SAINTE-BEUVE, *Volupté*, *op. cit.*, pp. 61-62.
- 35) *Ibid.*, p. 162.
- 36) Georges BATAILLE, «La somme athéologique 2», in *Œuvres complètes*, Paris : Éd. du Seuil, 1972, p. 168.
- 37) 池田潤「『失われた時を求めて』におけるドン・キホーテ的欲望」, 白百合女子大学言語・文学研究センター『言語・文学研究論集』第18号, 2018年3月, 11-23頁を参照。
- 38) Cf. Henri LEFEBVRE, *Au-delà du Structuralisme*, Paris : Éd. Anthropos, 1971.
- 39) *RTP*, IV, p. 457.
- 40) NOVALIS, «Blütenstaub», in *Gesammelte Werke*, Frankfurt am Main : Fischer, 2015, p. 403 ; 『ノヴァーリス作品集』(今泉文子訳), ちくま文庫, 2006年, 120-121頁。また別の断章に見える文言, 「かつては一切が霊の顕現であった。今日我々が目にするのは, 我々には理解できない死せる反復ばかりである。ヒエログリフの意味は失われている」(NOVALIS, «Fragmente des Jahres 1798», in *Gesammelte Werke*, Zürich : Bühl Verlag, 1946, p. 879 ; 上掲『ノヴァーリス作品集』, 235頁) 等もこの文脈で興味深い。